

わがまち  
協働大賞

# びわこの森を元気に

～森と人をつなげる仕組み～

一般社団法人 kikito



一般社団法人 kikito (以下 kikito) は、平成20年に活動を初めて今年で、8年目になる団体です。kikitoは、「琵琶湖」の水を育む森林と、人の営みをつなげる活動を行っています。昔は、生活に必要不可欠だった森。しかし、時代の流れの中で、人から遠い存在になっていきました。人が入らなくなつた森は、自然の生態系サイクルが変わり、森に大きな影響を与えることとなりました。そんな変わりゆく森を目の前にして、何ができるのか。その答えを探そうと、滋賀県中部森林整備事務所が始めたのは、森に携わる関係者を集めての勉強会でした。建築関係者や薪屋さんなど、木を使って事業を興している人や、森林組合などが普段どのように森と関わっているのかを「知ること」から始まりました。この勉強会で、森に携わる人たち同士が、互いを知らないということがわかってきました。

きたら、解決できることもたくさんあるのではないかと、これが、kikitoの原点です。そこから、「びわ湖の森を元気にする」取り組みが始まりました。現在では、多くのkikitoファンがいます。東近江地域だけでなく、滋賀県、そして全国でも数多くの人がkikitoの活動を応援しています。kikitoの活動は、なぜ人をひきつけ、そして応援したくなるのか、それは、関わる「人」にヒントがあるのではないかと、今回、kikitoの代表である大林恵子さんと、事務局長の田中一則さんにお話をお聞きしました。kikitoの活動の魅力、人や森との結びつき、そして、人と人との結びつきについて紹介したいと思います。

## 教えて！kikitoさん

**Q:kikitoでは、湖東地域の間伐材の買い取りを行い、びわ湖の森の木になる紙や文具などとして商品化されていますが間伐材の買い取りはいつからされているのですか。**

大林：平成21年から始まり、多賀町、日野町で行われてきましたが、平成27年から新たに東近江市でも始まりました。

**Q:この取り組みを始められたきっかけは？**

田中：愛東コミュニティセンターで開催された講演会で、「森の町内会」という東京の先進地事例が紹介されました。この取り組みを知り、kikitoでも同じようなことができるのではないかと考えたことがきっかけです。

これまで「採算が合わない」とか「お金にならない」などの理由で山林に放置されることが多かった間伐材を買い取ることで、持続的な事業と森林保全が促されなかつたと考えました。

また、紙製品の原料として使用する木材はチップ化（小さく破砕）されるため、建材用には利用できないような小径木や曲がり材、獣害などで傷ついた間伐材も買い取ることが出来る利点もあり、この取り組みで「少しでも多くのお金が森林所有者の手元に入ってほしい」という思いで始めました。

買い取った間伐材で「紙製品を作る」という似た取り組みは他にも行われていますが、kikito

itoの場合、紙製品が売れたら山にお金を返すのではなく、間伐材を利用した紙製品が売れる前提で山にお金を返す方式を採用し、1トン当たり6千円で少量でも買い取り、その場で現金でお渡しするようにしています。

個人が少量の材をチップ工場へ直接運搬依頼されても、断られたり安価になったり、運搬料を支払わなければならないなど、手間的にも価格的にも厳しいものがあります。そこをkikitoが皆様に代わってお引き受けすることで、森林所有者さんにとっても喜んでいただいていると感じています。

紙製品は一般的に消耗品で、当然、使ったらまた新しいものが必要になります。次の紙製品を作るためには次の間伐材が必要となり、製品原料としての間伐材が循環していきます。この取り組みで間伐面積が少しでも広がることで、健全な森林が広がり、そして私たちが受ける森林からの恩恵も、より多くそして大きくなることを期待すると共に、次世代まで循環していくことのできる持続可能な商品作りだと考えて取り組んでいます。

こうしたkikitoの思いを理解して、キトの紙製品などを購入してくださる団体や個人が少しずつ増えてきています。



↑間伐材の買い取りの様子

**Q:間伐材の買い取りはいつから、どのようにされているのですか？**

大林：間伐材の買い取りは、今年度は多賀町、東近江市で11月に1回ずつ、日野町で12月と1月の2回行いました。買い取りの1か月前ぐらいにチラシを新聞折り込みでお知らせしています。定着してきた多賀町や日野町では、この時期になると買い取りを期待して、待っておられる方もおられ、例年より時期がずれると折り込みチラシを見落とされたのかと思って電話があったりします。チラシには「午前10時から午後3時まで、〇〇に持ってきてください」と時間も書いてあるのですが、10時からなのに8時半ぐらいに来られる方もあり、そんなに待ってくださっていると嬉しいですね。

**Q: 買い取りはどれくらいの量ですか？  
どんな方が来られるのですか？**

大林：間伐材は軽トラで持ち込まれるのですが、1人で10回運ばれる方もおられます。昨年の年末の日野の買い取りでは1日に約50トン（軽トラック142台分）が集まりました。来られる方は高齢者が多いですが、なかにはご夫婦で来られたり、お孫さんを連れて来られたりする方もあります。木を出すのは1人では無理なので息子さんに頼んで、そのついでにご自身が所有しておられる山の境界を教えたりされています。そこに大きな意義があります。自分の家の山がここにあることを次の世代を担う人に教えることになり、継承をあきらめていた山主さんにとって、山の事を教える絶好の機会となっています。

間伐材を伐採して、軽トラに積むのをお孫さんに手伝ってもらい、買い取りの代金をすべてお孫さんにあげると、お孫さんは「今度も来たわ。」と言ってくれることもあるそうです。おじいちゃんにとっては、お孫さんにも出会えて、山の場所を継承することになっているのです。

田中：機械でデータ的に残すことだけが本当の継承ではないと思います。

大林：買い取りの現場には、親子やおじい

**Q: 他には、どのような活動をされていますか？**

A: 山主さんが所有している山の位置や境界などの情報を再確認し、次世代に伝えていくためにGPS機器の貸し出しを有料で行っています。また機器を貸し出すだけでなく、取得したデータの整理や、簡易測量図面の作成など、kikitoのスタッフがサポートする体制も整えています。

**Q: 企業と連携した活動があると聞きしたのですが…**

大林：平成24年10月、(株)平和堂と和南生産森林組合（東近江市和南町）の「琵琶湖森林づくりパートナー協定」をkikitoがコーディネートし、県内初の三者協定を締結しました。平和堂は創業50周年を機に森林保全のために「平和の森づくり」活動を滋賀・京都・福井・岐阜の4地域で取り組まれていました。このパートナー協定の締結により、和南生産森林組合所有林を、「平和の森・東近江」として、年2回、平和堂の社員さんが森林整備をされています。kikitoもそのお手伝いをしています。

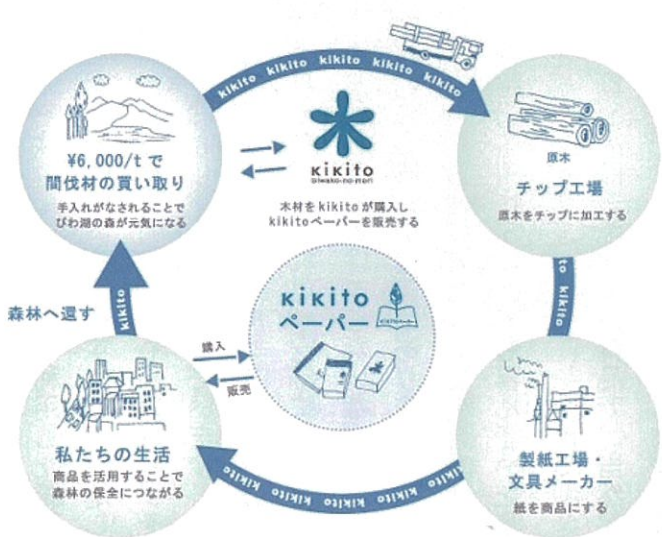
**Q: この2者をつなげるきっかけは何だったのですか？**

大林：kikitoメンバーの紹介で、平和堂のCSR担当者さんと出会いました。私の所属する(有)坂東林業が平和堂の里山保

ちゃんと孫の絆を感じることや、山に長年関わって来られた方の思いを知り感動する場面も多いです。皆さんの意識が少しずつ変わってきていると感じます。紙が売れることもうれいですが、もっと違う効果が買い取りで生まれます。

**Q: 間伐材から、どのような流れで紙になるのですか？**

大林：買い取った間伐材は、県内のチップ工場でチップにして製紙メーカーに届けられ、kikitoのペーパーとして製品化されていきます。他にも、鉛筆やファイル、名刺の台紙などそれぞれ製品化してもらう工場は別々で、kikitoは間伐材を渡して



↑kikito ペーパーの製品化への流れ

全活動で使っておられた長鎌を研ぐのをお手伝いしたことがきっかけです。「琵琶湖森林づくりパートナー協定」の取り組みをしたくて、出会った際にこの担当者さんに「企業の森」の活動をしませんかと声をかけていました。

これまでも和南生産森林組合と、話し合いはされていたのですが、なかなかうまく結びつかなかったので、kikitoがコーディネートすることにより、協定締結に結び付きました。

**Q: kikitoの活動をしてみて、感じたことはありますか？**

田中：自分は「山側の人間」として山に関わっています。山のことを分っていないのは「山側の人間」かもしれません。身近すぎて気づかないことも、違う側の人や関わっていない人からの話を聞くと意識が変わったり、新しい発見があり、視野が広がります。大林：kikitoの活動を通して、多業種のいろんな立ち位置の人と出会って話をする中で、いろんな視点から物を見られるようになりました。kikitoを通じて自分自身が成長していると感じています。

**◆kikito ペーパーはこんなところで使われています！！**

- ◇主なコピー用紙の販売実績
 

東近江市役所	年間	1200 ケース
多賀町役場	年間	400 ケース
J P 労組	年間	120 ケース
神戸植物免疫研究所	年間	500 ケース
- ◇主な印刷用ペーパー実績
 

(株)平和堂 CSRレポート	
そくら (東近江市発行のまちのいいとこ情報誌)	
多賀町広報誌	



製品化してもらい、製品になったものをkikitoが販売するという流れです。

この間伐材の買い取りや製品化は、kikitoの理念に共感し、その活動を支援しようとする多くの事業所の協力があった実現しました。例えば、間伐材を計量するトラックを貸してもらったり、経済ロットにあわない間伐材をチップ化してもらったりなどということでした。

最初のうちはkikitoと言う団体の知名度もなく、この事業もそんなに長くは続かないだろうと思っておられた事業所の代表者も地道なkikitoの活動の様子を見て信頼も高まって来たのだと思います。



↑事務局長の田中一則さん

大林さんご本人は「特に普段は、コーディネートを意識しているということはないが、人から聞いた困りごとなどを気に留めておいて、機会があるたびに人に話したり、チラシを配ったりしている。発信しているつながってくる。」と話されます。そんな大林さんについて田中さんは、「このように意識して活動している大林さんだからこそ賞をもらったのだと思う。意識していたとしても広げていこうとは思わなかった。すごいなというのは物おじしないこと。損得抜きで、その人のためになるのなら努力を惜しまないこと。感謝、おかげさまの気持ちでいることが多いこと。記憶力が良くていろんなエピソードが言えるすごい女性。」と評されます。

**協働コーディネーター賞受賞者に聞く！！**

**コーディネーターとしての秘訣は？**



↑コーディネーター賞を受賞された大林恵子さん